

ゆうきぎ  
結城座とは！？

結城座の歴史は江戸時代の  
寛永12年(1635年)に初代結城  
孫三郎が座を創設し、江戸幕府  
公認のあやつり人形の一者として  
興行を認められ始まります。  
2021年6月には、東京で13代目  
結城孫三郎の襲名披露公演を  
行いました。

古典の糸あやつりをベースにし、  
新作公演、海外公演、国際共同  
制作公演、写し絵公演等、幅広い  
公演活動を行い、世界各国で高い  
評価を得ています。  
(詳しくは、結城座の web サイト  
をご覧ください。)



結城座 WEB



しゅつえん  
出演

- 結城座 人形遣い  
十三代目 結城 孫三郎  
三代目 両川 船遊  
結城 育子  
湯本 アキ  
小貫 泰明  
大浦 恵実
- 弾き語り  
新内 多賀太夫

スタッフ

- 照明 ●大屋 恵一  
音響 ●島 猛  
映像 ●濱島 将裕  
舞台監督 ●三津 久  
舞台監督 助手 ●大野 英寿

公益財団法人 江戸系あやつり人形 結城座

〒184-0015 東京都 小金井市 貫井北町 3-18-2 TEL 042-322-9750 FAX 042-322-3976

令和3年度

文化芸術による子供育成総合事業 — 巡回公演事業 —

えどいど にんぎょう せかい  
江戸系あやつり人形の世界

えどぶんか たの  
~江戸文化を楽しむもう!~

にんぎょうじょうり  
人形浄瑠璃



えどいど にんぎょう ゆうきぎ  
江戸系あやつり人形 結城座

文化芸術による子供育成総合事業 — 巡回公演事業 —

我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的としています。事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行いません。また、実演では、できるだけ子供たちにも参加してもらいます。



一 にんぎょう えんもく かいせつ  
人形と演目の解説



二 ことぶきじし  
寿獅子

結城座に最も古くから伝わる演目のひとつ。  
厄を払い、福を呼び込むといわれ、お正月や祭りで舞われるおめでたい獅子舞を、糸あやつりならではのダイナミックな動きで楽しみいただけます。  
一人の人形遣いが、獅子頭と幌をかぶった2人の獅子遣いの3体分を扱います。のどかな獅子・蝶を追う獅子・逃げられて怒り狂う獅子など様々な舞をご覧ください。

三 だておすめ こいのひがのこ ひ みやぐら ば  
伊達娘恋緋鹿子 火の見櫓の場

原作 河竹黙阿弥 義太夫 竹本素京

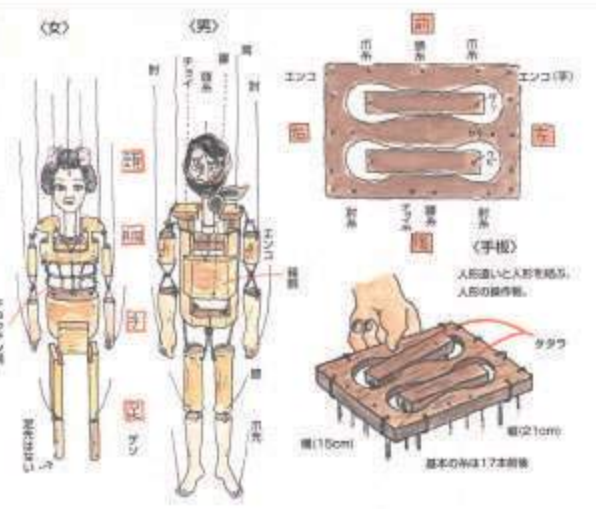
八百屋の娘お七の恋人吉三郎は、紛失した名刀「天国の剣」のために切腹の命を受けます。恋しい吉三郎の命を救うため、お七は図らずも手にした天国の剣を手渡そうと、火刑を覚悟で火事を知らせる火の見櫓の太鼓を打ち鳴らし、夜中閉まっていた町々の木戸を開かせます。(江戸当時、虚偽の火事を知らせることは放火と同じく火刑に処せられる大罪です。)雪の夜の美しくも哀しい名場面、美しい女形とその一途な恋心に心打たれる作品です。  
江戸時代の実話をもとに作られた名作芝居。「八百屋お七」。人形浄瑠璃としても有名で、歌舞伎では「人形振り(人形浄瑠璃の人形の動きを真似して感情を表現する)」で演出されます。結城座では九代目結城孫三郎以降、代々の孫三郎の十八番の当たり狂言として継承され、人気を得ています。  
今回は、「天国の剣」を盗んだ湯灌場吉三と弁長が争う場面も上演いたします。義太夫は、十三代目孫三郎の祖母である故竹本素京の語りで、太夫と三味線弾きが人形で登場します。



四 どうかいどうちゅうひぎくりげ あかさかなみき らんとうば  
東海道中膝栗毛 ~赤坂並木から卯塔場まで~

原作 十返舎一九 作詞・作曲 富士松魯中(新内節)  
弾き語り 新内多賀太夫  
構成・監修 十二代目結城孫三郎

弥次郎兵衛と喜多八は、江戸から上方(京都・大阪方面)に向かって呑気な旅をしています。赤坂並木を通りかかると酒徳利を下げた子供が通ります。これの一つ目小僧と間違えて打ち叩いていると、その親爺が現れ「わが子に何をしやる」と弥次郎兵衛の首をしめます。親爺は気絶した弥次郎兵衛の身ぐるみをはぎ、そばにあった経帷子(死装束)を着せて立去ります。  
しばらく後、息を吹き返した弥次郎兵衛は自分が死んだと思い、嘆き悲しむのでした。  
江戸時代大ベストセラーとなった十返舎一九の滑稽本。江戸の庶民文化に親しむ名作です。現在でも「弥次さん喜多さん」として人気が高く、映画やドラマでも親しまれています。  
結城座では江戸時代と同じく生の新内弾き語りによる、江戸系あやつり人形の繊細な技や仕掛け、江戸前の台詞のかけあい等を体感できる、代表的な古典演目の一つ。  
2020年からは歌川広重の「東海道五十三次」の浮世絵を基に舞台に古典では異例のデジタル映像も投影し、臨場感を高めた演出で若い世代からも好評を得ています。  
今回の文化芸術による子供育成総合事業—巡回公演事業—では、数名の児童生徒が人形遣いとして旅人と村人の役で本物の舞台に立つ、成果発表にもご注目ください。



「江戸系あやつり人形」の構造  
人形の大きさは、およそ60センチで、頭、胴、手、足の四つの部分で構成されています。  
人形を動かすあやつり糸は、通常で17本。また多いものでは40本から50本ほどの糸を用いることもあります。  
それを結城座特有の「手板」で操作します。このスタイルは、世界的にも大変珍しく「結城式」、もしくは「日本式手板」といわれています。



江戸時代の字ピラ(チラシ)  
タイトルに、「御操 結城孫三郎」とあわせて、幕府公認であることを示す「御免」の文字があります。  
また当時の観劇料が、「御老人前 銀毫朱(現在の約8,000円相当)」であることがわかります。